

II 情緒障害児等の認知・言語発達の特徴および 障害の改善に関する研究(第2報)

I 言語発達検査

研究第6部 権平俊子・小田正敏・神田久男

山本清恵・吉川政夫・稗田涼子

共同研究者 結城静子(心理治療室)

山田正子(城北幼稚園)

はじめに

われわれは昭和29年より、情緒障害児等(脳に器質的な障害があり投薬治療を行っている者を含む)などに対して、神経症的習癖、非社会的行動、反社会的行動、精神身体的症状などの問題があり、そのため過動などの行動の異常を惹起して、注意の集中時間が短く、注意散漫、衝動的で、協動運動が拙く、人の話し言葉を十分に聞くことや絵本などを静かに見たり読んでもらうたりできない子どもに遊戯治療を行うと共に母親指導を行ってきた。こうした対象児の多くは、ある程度問題が解決してきても、認知・言語発達に特徴的な障害があるために、言語発達が遅れ、就学後には学習についていけず、生活・行動面での適応性に欠けると共に学習面での遅れが目立つ場合が多かった。そこで、この学習面でのつまずきの改善のために、算数による言語学習の内容と方法に関する研究を昭和50年より行ってきた。こうした一連の研究の結果、これらの子ども達の認知・言語発達の特徴を捉えて、その改善を早期に、より効果的に行うことが出来れば、学習のつまずきを改善してゆく手掛かりができる。その結果、学校生活に於ても、学習面での適応が、生活・行動面での適応性を増し、更に学校外での社会生活における適応もよりよくして、非行化の防止などにも役立つのではないかと考えている。

この度の研究は、第1報で報告したものにさらに検討を加えて、言語発達検査法が完成したと思われるので報告する。

I 言語発達検査

1. 目的

幼児・児童の発達過程は、単なる生体の成熟や成長などの生物学的・生理学的な面での発達と同時に、その子ども達が生活している文化的諸条件のうちで、それぞれの年齢に応じ、個人的自立と社会的責任に応じるうまさや過程の発達が重要である。こうした機能的な発達は、子どもを取り巻く環境からの刺激反応による学習により、新しく獲得され形成される変化であり発達である。このような幼児の発達は、①感覚運動領域の発達、②ことばの理解と話しことばの領域の発達、③基本的生活習慣の領域の発達、④対人関係の領域の発達、に大別される。すなわち、個体としての幼児の全人的な心身の発達とは、この4領域の調和的な発達である。情緒障害児等とは、この4領域のすべてかあるいは、そのうちのいくつかに障害がある場合が多いのである。こうした子どもは落ち着いて静かにしておれず、絶えず動いており、母子間の十分な会話も成立せず、禁止や制止のことばかけが母親から子どもへの話しかけの大部分を占めている場合が多い。又、このような子どもは刺激に非常に反応しやすく、興味・関心の対象が次から次へと移りやすく、しかも1つのことに対する注意の持続が困難で、じつくりと課題にとり組むことができず、乱雑で投げやりな学習態度が見られる。さらに、気分の変動が激しく、ささいな刺激で、急激にかつ度を越えた烈しい感情興奮をひきおこすような子どもである。こうした子どもは、乳幼児期から、母子間のコミュニケーションが十分に成立せず、ことばが欠如していたり、出現しても単語レベルであったり、二語文・多語文へと発達しても完全な文ではしゃべれず、文法構成の未熟な文、即ち、機能語の欠落した文しかしゃべれない子どもが多い。こうした子どもの多くは構音

上にも問題があり、未熟構音が就学時点まで続く者が多い。

情緒障害児等の言語発達の違いには様々な面があるが、学習のつまづきを改善するための算数による言語学習という点からとらえ直すと、対象児の言語発達の特徴として、機能語が欠落しやすいという知見を得ている。即ち、物の名称のような語と対象が、一義的に1対1の対応をするような内容語(名詞・動詞・形容詞)は、情緒障害児等も毎日の生活経験の中での具体的な場面で繰り返し繰り返し話しかけられることによって、定着しやすいが、独立性が乏しく、抽象的な面の強い、文構成上の関係概念を示す機能語(助詞・助動詞・接続詞・代名詞・形式名詞等)は、母親や周囲の人々の話しことばを十分に聞いて理解していないため、欠落しやすい。このように、情緒障害児等の言語発達が遅れるということは以前から経験的にわかっていたが、その中核的な問題は、機能語の欠落にある点は全く新しい発見であるため、この特徴を把握するための独立した検査法がこれまでなかった。そのため、算数の文章題での理解できない文章の分析、知能検査の各設問の内容で理解し得なかった問題の分析、自由遊び、課題遊び等の場面での発話の分析、等々を通して、およその理解レベルを求めてきたが、この方法では、何才ではどんな機能語がどの程度欠落するかの普通児での尺度を明確にしないと、細部までは分析できず、ただ機能語が欠落したアンバランスな言語発達を示すしか言えなかった。そこで、4、5、6歳の幼児を対象とする、言語発達のアンバランスをその内容まで分析して、言語指導、訓練を図るための目安となる機能語の獲得状態を測定しうる検査法として、A系列20問、B系列20問からなる試案を安田生命社会事業団年報(昭和55年度)に発表した。この報告に更に検査法の改良を加えて、3、4、5、6歳の幼児に施行した結果を第1報に報告



写真1 検査器具

した。更に検討を加えて、A系列10問、B系列6問、C系列5問、計21問を選びだして、3、4、5、6歳児に施行した。この結果に検討を加えて、幼児の機能語の獲得状態を的確に測定できて、機能語を獲得するための訓練にも使用できるような器具を作成するために役立てたい。

2. 方法

検査法の作成にあたって次の点に留意した。

- 1) 一般の幼児が日常生活環境の中で聞いたり話したりするような言語を選択した。
- 2) 各々の生活年齢と言語発達年齢とが対応するようにする。逆に、この言語発達検査で、臨床上での子どもの言語発達レベルを3オレベル、4オレベル、5オレベル、6オレベルでの各発達レベルで捉えられるようにする。
- 3) 幼児が興味を示して検査に応じるように器具を工夫した。
- 4) 子どもがあきてしまわずに、短時間で検査できるように工夫した。

a) 言語発達検査実施上の注意

1. A、B、Cの各群の問題をはじめの前に積木を子どもの前に定型にならべる。
2. 子どもを検査用具の前に坐わせ、検査者は子どもに話しやすい場所に坐わる。
3. A、B、Cの各群の問題に用いる積木と棒は以下のとおりとする。

A群(No.1~10)

定型：子どもの右から 黄色い四角、緑の丸、白い四角、青い三角、赤い丸各1個
(いずれも厚さ14mm)。棒の長さは5本とも同じ

B群(No.11~16) A群の積木と同じ色、形で厚さの異なる積木を用いる。

定型：子どもの右から厚さ7mmの黄色い四角、厚さ28mmの緑色の丸、厚さ21mmの白い四角、厚さ14mmの青い三角、厚さ35mmの赤い丸、各1個、棒の長さは5本とも同じ。

C群(No.17~21) 長さの異なる棒5本を用いる。

○棒のさし方は、子どもの右から130mm、160mm、40mm、70mm、100mmとする。

○積木の使い方

- (1) No.17, 18, 19, 21: B群の積木を用いる。即ち定型は子どもの右から黄色い四角(厚さ7mm)、緑の丸(厚さ28mm)、白い四角(厚さ21mm)、青い三角(厚さ14mm)、赤い丸(厚さ35mm)、

(2)No.20 黄色い四角2個（厚さ7mmと14mm）、白い四角2個（厚さ14mmと21mm）、とピンクの立方体1個を用いる。

ならべ方は子どもの右から 黄色い四角（厚さ14mm）、白い四角（厚さ21mm）、黄色い四角（厚さ7mm）、ピンクの立方体、白い四角（厚さ14mm）の順とする。

第1報では、A系列20問、B系列10問、C系列10問を行った結果、問題数が多く検査の後半子どもがあきてしまった。そこで年齢差がはっきりでなかったり、同じような問題を省き、A系列—10問題、B系列—6問題、C系列—5問題とした。（問題は表1参照）

b) 検査法

A, B, C系列とも、それぞれの検査器具を用いて、平板に棒を立てて、積木を棒にさしたり、子どもの前に並べて、子どもが聞きとりやすいような速度で問題をはっきりと読み聞かせる。子どもが解らないで反応しないような時には、もう1度だけ読み聞かせる。子どもが「これ？」とか「どうするの」など問いかけてきたときには、「あなたが思ったようにしてよいのよ」といって、「そう」とか「それでよいの」などといったり、子どもの問

いかけにうなずいたり、首をふったり眼で合図したりなどして、正答に導くように暗示を与えないように注意を払う。

問題は「赤い積木を棒にさしましょう。」というような21問からなる問題に従って、子どもが正しく動作すれば合格である。これらの全問題を東京都と日立市の幼稚園在園中の3才児—75名、4才児—100名、5才児—100名、6才児—90名に施行した。

3. 結果および考察

検査結果は図1・表2で示した。A, B, C系列21問の各問題別に3, 4, 5, 6才の各年齢別に通過率を算出してグラフと表にしたものである。

問題9「三角は何色ですか」 3才—77.3%, 4才—75%, 5才—83%, 6才—98.9%で3才より4才がやや低い、この1問を除くと20問の問題に於て、通過率が年齢があがるとともにあがっている。この結果から、機能語習得の発達は、子どもにより個人差があり、表で示したように2年間隔でみると、年齢により、はっきり発達に差があるといえる。

本検査の結果、本器具を利用することによって、言語発達検査を行うことができるし、機能語習得の欠落を見

表1 言語発達検査票

検査日 昭和 年 月 日
 生年月日 昭和 年 月 日
 男・女 才 月

正誤	番号	問 題	備 考
A 群 厚さの同じ 5色の積木 棒の高さは 同じ	1	赤い積木を棒にさしましょう	できない時、「赤はどれ」と聞いて棒にさすことを教える
	2	大きい四角を棒にさしましょう	さした積木は元へ戻す
	3	小さい丸もさしましょう	
	4	大きいのから順に重ねてこの棒にさしましょう	定型にならべ1本の棒を指示
	5	四角は全部とりましょう(2つ)	定型に積木を元に戻す
	6	丸だけとりましょう(2つ)	取った積木を元に戻す
	7	残ったのは何という形ですか	戻して定型に棒にさし「四角とって、丸とって」と言って三角のみで
B 群 厚さの異なる 5色の積木 棒の高さは 同じ	8	一番小さいのは何という形ですか	定型に棒にさして
	9	三角は何色ですか	
	10	真中のものをとりましょう	取ったのは元へ戻す
	11	高いものからこちらから順に1つずつさしましょう	子どもの右の棒から
	12	2番目に高いのを棒にさしましょう	赤は棒にさしたままで、赤以外の積木を子供の前にならべて、1本の棒を指示
	13	下から3番目は何色ですか	1本の棒に下から黄・青・白・緑の順に重ねて
	14	上から4番目は何という形ですか	さらに赤を重ねて
C 群 棒の高さは 異なる5本	15	同じ形に分けて重ねましょう	定型から三角を除いた4個を定型の順に棒にさして
	16	ちがう形をとりましょう	正方形2個と三角形で
	17	黄色の積木を2番目に背の低い棒にさしましょう	B群積木5個を使う定型にならべて
	18	一番厚い積木を2番目に背の低い棒にさしましょう	取った積木は元へ戻す
	19	筒の形の積木だけ真中の棒にさしましょう	緑を除く4個をならべて
	20	さいころの形の積木を真中の棒にさしましょう	黄2個、白2個、ピンク1個をならべて
	21	積木の薄い順に、背の低い棒の方から順にさしましょう	B群の積木を定型にならべて

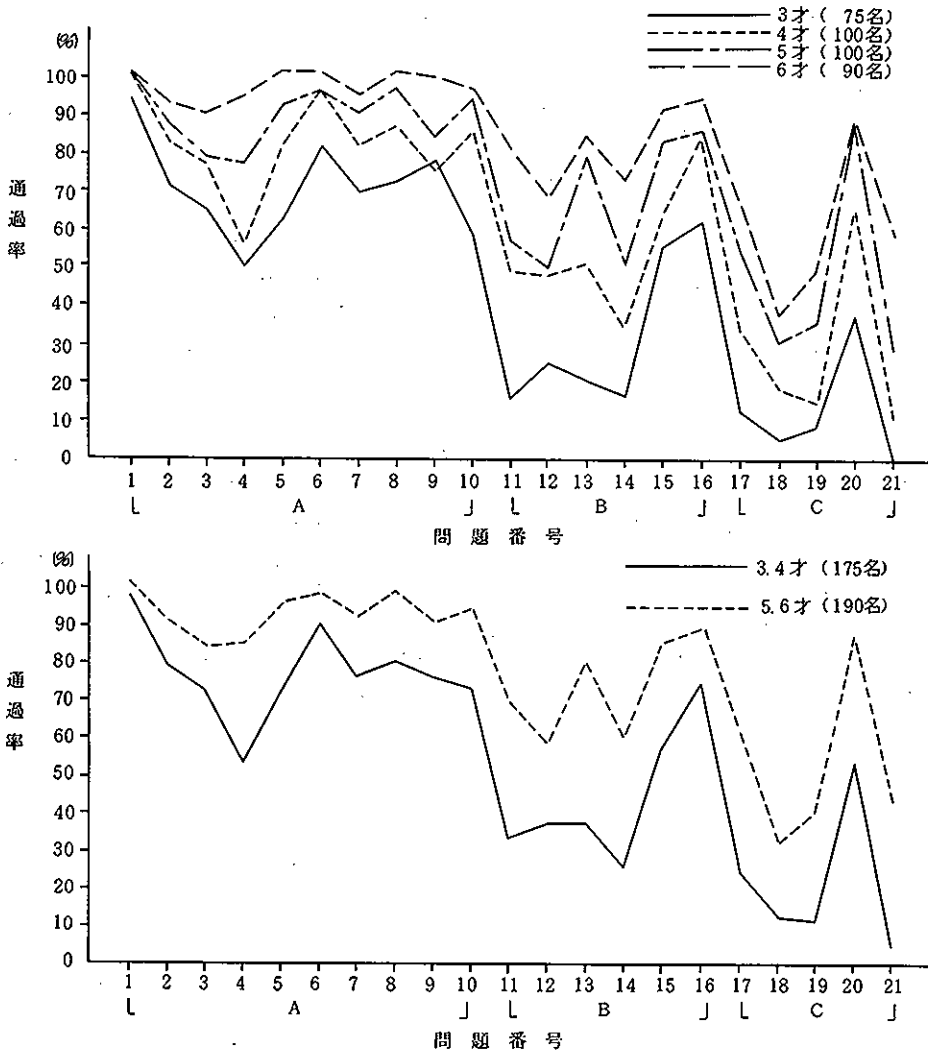


図1 言語発達検査結果

表2 年齢別通過率

問題番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
3才	正答率	70	53	48	37	46	61	52	54	58	43	12	19	16	13	42	47	10	5	7	29	1
	通過率(%)	93.3	70.7	64.0	49.3	61.3	81.3	69.3	72.0	77.3	57.3	16.0	25.3	21.3	17.3	56.0	62.7	13.3	6.7	9.3	38.7	1.3
4才	正答率	99	82	76	55	81	95	81	86	75	85	49	48	51	35	64	84	35	20	16	67	12
	通過率(%)	99	82	76	55	81	95	81	86	75	85	49	48	51	35	64	84	35	20	16	67	12
5才	正答率	100	87	78	76	91	95	89	96	83	93	57	50	79	51	83	86	55	31	36	88	30
	通過率(%)	100	87	78	76	91	95	89	96	83	93	57	50	79	51	83	86	55	31	36	88	30
6才	正答率	90	83	80	84	90	90	85	90	89	86	73	61	76	66	82	85	61	34	45	80	54
	通過率(%)	100	92.2	88.9	93.3	100	100	94.4	100	98.9	95.6	81.1	67.8	84.4	73.3	91.1	94.4	67.8	37.8	50.0	88.9	60.0

(注) 3才児 被験児数 75名 4才児 被験児数 100名
 平均年齢 3才7ヶ月 平均年齢 4才6ヶ月
 5才児 被験児数 100名 6才児 被験児数 90名
 平均年齢 5才6ヶ月 平均年齢 6才4ヶ月

表3 3・4才、5・6才別通過率

問題番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
3・4才 正答数	69	135	124	92	127	156	133	140	133	128	61	67	67	48	106	131	45	25	23	96	13
通過率(%)	96.6	77.1	70.9	52.6	72.6	89.1	76.0	80.0	76.0	73.1	34.9	38.3	38.3	27.4	60.6	74.9	25.7	14.3	13.1	54.9	7.4
5・6才 正答数	190	170	158	160	181	185	174	186	172	179	130	111	155	117	165	171	116	65	81	68	84
通過率(%)	100	89.5	83.2	84.2	95.3	97.4	91.6	97.9	90.5	94.2	68.4	58.4	81.6	61.6	86.8	90.0	61.1	34.2	42.6	88.4	44.2

(注) 3・4才 被験児数 175名 5・6才 被験児数 190名

出した子どもに対して、機能語を獲得できるよう訓練することも可能である。

a) 幼児の言語発達と機能語

幼児の言語発達の指標として1語文から2語文への段階を考えてみると、概ね1歳～1歳半までの時期が1語文の時期であり、「ウマウマ」・「ブーブー」・「ワンワン」・「ネンネ」・「キレーキレー」・「ダッコ」等が出現しやすく、それぞれ「食べ物が欲しい」・「自動車だ」・「ワンワンがいるよ」・「寝てる・寝る」・「きれねー」等々の文意を表わしている。このような1語文の時期から次の2語文の時期に発達する際に、2語文の構成には自立語と自立語から成り立っているものと、自立語と付属語の組合せから成り立っているものがあり、情緒障害児等は自立語と自立語の組合せの2語文は発達するが、自立語と付属語を組合せた2語文の発達がうまくゆかないために機能語の欠落した文法構成の未熟な発話となり、語彙の発達はできても構文の発達は障害を受ける。その原因は前記したように情緒障害児等が日常的にげない母子間の会話が十分に成立せず、幼児期に母と子の相互交渉のなかで、機能語をどのように使わなければならなかったかを学習できない点にある。

日本総合愛育研究所の研究第6部においては、すでにこの10年間にわたり、情緒障害児等の学習のつまずきを改善するために算数による言語学習の指導方法に関する研究を行ってきた。その結果、学習のつまずきの原因として、機能語を含む文章題（例えば：3と4で□、9は2と□、4より3大きいかずは□、10から6ひくと□、4から12までかきなさい、4と1のちがいは□等々）ができないことを発見した。幼児期に十分機能語を獲得することに失敗した子どもが6歳以降に、機能語を学習しなおすことは、言語発達のある時期に当然獲得すべきものを獲得できなくて、再学習することになるのであるが、特別の方法を取らなければ、極わめて困難な作業であり、多くの場合は再学習できずに、学業についていけなくなる。この特別の方法というのが算数による言語学習である。こゝでは、情緒障害児等は機能語が欠落しやすいが、算数の文章題の理解にもはっきりそのことがでており、

この改善のためには算数による言語学習が有効であるという点にとどめておく。

b) 機能語の概念

1歳半から2歳までの言語
2語文（文節初期）
（自立語+（自立語）+対象指示語（名詞）
パパ、カイヤ、状態指示語（動詞・形容詞）
ブーブー、ワンワン
2語文（文節後期）
（自立語）+（付属語）+機能語（語と語の関係、結び、キレーキレー、ネー、つきを表わす語、助詞等）
ママ、ニー、

幼児の言語発達からみると、自立語+自立語から自立語+付属語への発達過程で障害を受け、パパ、カイヤ、ウマウマ、オイシイ、パス、ネンネ等の内容語と内容語の組み合わせは情緒障害等の幼児は可能であるが、キレーキレー、ネー、ママ、ニー等の内容語と機能語の組み合わせは定着しない。即ち、内容語（名詞、動詞、形容詞）は発達するが、機能語（助詞、助動詞、接続詞等）は欠落しやすい。

機能語の欠落した情緒障害児を対象にして、算数学習を手だてとして、言語学習を試みた結果をみると、助詞・助動詞・接続詞や、（…とき、…あと、…まえ、…から、…うち、…おき、…もの、…ぶん、…とおり、…ところ、どちら、そと、どの、…こと、等）の形式名詞・代名詞をはじめ、（なかなか、もう、いつまでも、何度、それぞれ、いくら、どれだけ、いろいろ、はじめに、やっぱり、どんな、もし、等）の副詞も欠落している。こうした、情緒障害児等の言語獲得の実態から機能語をみると、英語の function word の定義（「文法構造上の諸関係を表わすのを主要な任務とする語。たとえば、前置詞、助動詞、接続詞、接続副詞、関係詞、などで、従来、虚語（empty word）、形式語（form word）などの名で呼ばれていたものをさす。」（「新言語学辞典」研究社）では日本語の機能語はうまく説明できない。たとえば、助詞とか形式名詞は機能語なのか内容語なのかを分類する規準を次のようにすると明確になると思われる、

①文法構造上の諸関係を表わすのを主要な任務とする語：たとえば、助詞、助動詞、接続詞等、②虚語(empty word)、形式語(form word)などと呼ばれる、概念内容が漠然としている語や極めて抽象的な概念しかあらわさない語：たとえば、代名詞、形式名詞、副詞等、を機能語として、内容語(名詞・動詞・形容詞)と区別するとはっきりすると思われる。即ち、機能語か内容語かという概念の区別は語として具体的な意味内容を表わしているかどうか、文の構成上文脈(context)や環境(situation)を抜きにしても意味がはっきりとつかめるかどうかという点がポイントになるだろうと思われる。言いかえると、独立性が乏しく総称的、共通的、一般的な意味を伝達できない語は機能語に分類し得ると考える。従って、機能語であるか内容語であるかは、すべての品詞をどちらかに分類する必要はないと考える。当然、中間的な語は存在するし、無理にどちらかに分類しても生産的ではないと考える。内容語である名詞でも、より意味内容が具体的であれば理解しやすいし、抽象的なればなるほど理解は困難である。かかる観点に立って、障害児(情緒障害児・聴覚障害児)が言語発達過程で、欠落しやすい語群、算数学習を手だてとした言語学習で、再学習が可能な語群として、われわれは機能語に着目し、研究を続けてきた。今回、一応の研究の成果をみたので、ここに報告する。

参 考 文 献

- 権平俊子他：情緒障害児に対する学習指導に関する研究，日本心理学会第41回大会発表論文集，昭和52年
- 山本清恵他：情緒障害児に対する学習指導に関する研究，その1。言語面についての学習指導，日本心理学会第42回大会発表論文集，昭和53年
- 権平俊子他：情緒障害児に対する学習指導に関する研究，その2。事例研究，日本心理学会第42回大会発表論文集，昭和53年
- 山本清恵他：情緒障害等に対する学習指導に関する研究，第Ⅲ報，(1)学習指導のプロセス，日本心理学会第43回大会発表論文集，昭和54年
- 権平俊子他：情緒障害児等に対する学習指導に関する研究，第Ⅲ報，(2)自閉性を示した幼児の成人期の問題(言語発達のアンバランスの知見)日本心理学会第43回大会発表論文集，昭和54年
- 山本清恵他：情緒障害児等に対する学習指導に関する研究(第Ⅳ報)その1.学習障害と言語理解，日本心理学会第44回大会発表論文集，昭和55年
- 権平俊子他：情緒障害児等に対する学習指導に関する研究(第Ⅳ報)その2.学習障害に対する予防とその対策—就学猶予をした事例，日本心理学会第44回大会発表論文集，昭和55年
- 権平俊子他：幼児の認知及び言語の発達に関する研究(第Ⅰ報)—言語発達検査試案—日本心理学会第45回大会発表論文集，昭和56年
- 山本清恵他：情緒障害児等に対する学習指導に関する研究，第Ⅴ報—学習予測テスト試案について—日本心理学会第45回大会発表論文集，昭和56年
- 権平俊子他：幼児の認知及び言語の発達に関する研究(第Ⅱ報)—言語発達検査—日本心理学会第46回大会予稿集，昭和57年
- 山本清恵他：情緒障害児に対する学習指導に関する研究(第Ⅳ報)—学習予測テストの再検討—日本心理学会第46回大会発表論文，昭和57年
- 権平俊子他：情緒障害児等の学業指導に関する研究，日本総合愛育研究所紀要第14集，昭和53年
- 権平俊子他：情緒障害児等の学業指導に関する研究(第2報)遊戯療法に引き続き学習指導を行った男児の一事例，日本総合愛育研究所紀要第15集，昭和54年
- 権平俊子他：情緒障害児等の学習指導に関する研究(第3報)教科学習と言語発達の関係，日本総合愛育研究所紀要第16集，昭和55年
- 権平俊子他：情緒障害・脳損傷児等の認知・言語発達の特徴及びその障害の改善に関する研究，安田生命事業団年報，第16号，昭和55年
- 石戸谷栄一：言語発達の障害と学習不適應について心理測定ジャーナル，15(4)，日本心理適性研究所，昭和54年
- 小田正敏他：三，ことばの発達：聴覚障害幼児への早期配慮，障害児(者)の生涯と教育2：聴覚障害，福村出版，1978年
- 小田正敏：聴覚障害児の言語発達—機能語の獲得—第18回日本教育心理学会総論文集，1976年
- 小田正敏：聴覚障害児の発語について，第20回日本教育心理学会総論文集，1978年
- 小田正敏：A NEW METHOD OF LANGUAGE INSTRUCTION FOR HARD OF HEARING—THROUGH THE DRILL OF COMPUTATION—，BULLETIN, of the Tokyo Metropolitan Rehabilitation Center for the physically and Mentally Handicapped, 1978
- 石戸谷栄一・小田正敏：聴覚障害児の言語発達につ

- いて、第24回日本オーソロジ学会論文集 1979年
22. 小田正敏他：聴覚障害児の言語学習，第21回日本教育心理学会総会論文集，1979年
23. 小田正敏他：難聴に軽度精神遅と情緒障害を伴う子の学習指導，第25回日本教育心理学総論文集，1983年
24. 小田正敏他：普通幼稚園に在籍している高度難聴幼児の言語指導の方法と内容，障害児教育事例事典，東京法令出版，1978
25. 小田正敏他：普通小学校に在籍している聴覚障害児の言語学習，障害児教育事例事典，東京法令出版，1978年
26. 権平俊子：幼児の認知及び言語の発達に関する研究（第三報）一言語発達検査一，日本心理学会第47回大会発表論文集，1983年
27. 山本清恵他：情緒障害児等に対する学習指導に関する研究（第四報）一言語発達遅滞児の学習指導一，日本心理学会第47回大会発表論文集，1983年
28. 権平俊子他：情緒障害児等の認知・言語発達の特徴およびその障害の改善に関する研究（第一報）—(I) 言語発達検査—(II) 算数学習予測テスト—，日本総合愛育研究所紀要第18集，昭和57年
29. 石戸谷栄一：教育の基本的問題点—^{みっこ}三才児の魂と人間形成—，国際学院埼玉短期大学研究紀要第5号，昭和59年

Abstract

Study on Feature & Improvement of Disability in Emotionally Disturbed and Brain Dysfunction Children's Cognition and Language Development (2) Test of Language Development

Toshiko GONDAIRA, Masatoshi ODA, Hisao KANDA,
Kiyoe YAMAMOTO, Masao KIKKAWA, Ryoko HIEDA,
Shizuko YUKI,
Masako YAMADA

Since 1954 we have treated emotionally disturbed children by play therapy and guided their mothers to bring up their children properly. These children have many problems such as neurotic manifestation (tics, mustism, school refusal), difficulties of adaptation, neurotic disorder, psychosomatic disorder, delinquency, hyperactivity, short attention span, distractibility, impulsiveness, incoordination, perceptive impairment, disorders of concept formation, neurologic and EEG abnormalities, speech and language problems, and specific learning disabilities in reading, arithmetic, writing spelling, so that they can not listen to their mothers attentively. They didn't hear speech enough in child-hood because of their emotional disturbances.

They showed disturbances of speech and language and were mostly under-achievers due to their disturbances of cognition & language development. We have studied on learning of language by means of arithmetic in order to improve failure of learning and verbal development since 1975. If we will work out this problem of feature of these children's cognition & verbal development, we have cue to improve their failure of learning, and they will be well adapted to their situations. This study reports the method of language development test. This test of language development is designed to look over the feature of emotionally disturbed children's verbal development. We found out the feature of these children's language disorder was the lack of function word. These children will master content word but they can not learn function word. This test battery is devised to examine the lack of function word and to be used for learning of function word as well.